

ポスターセッション

12月4日（木）9：00～14：30／3Fラウンジ

座 長 有限会社ウェルフェア 代表理事 田邊 恒一 氏

座 長 社会福祉法人寿光会 理事長 勝部 猛彦 氏

テーマ「【グループホームケア、パーソン・センタード・ケア、自立支援、フレイル予防】＋【重度化対応、医療連携、看取り、ACP】＋【人材確保・行政支援策、人材育成・人材定着、業務改善・環境改善、生産性向上（ICT、ロボット）、物価上昇・物価高騰対策】＋【その他】」

時間	演題 / 副題	所 属	発表者 (都道府県)
9:00 }	マニュアルではなく“その人”を見るケアへ ～ PCCが照らす“その人らしさ”の再発見～	フロイデグループホーム美和	笹崎 圭太 (茨城県)
9:15 }	入居者QOL向上に向けた家族との連携 個別イベント	多機能地域ケアホームありがとう グループホーム	松原 夕爾 (広島県)
9:30 }	ケアマッピングでひもとく認知症ケア DCM法とひもときシートの活用	グループホームわかまつ	渡久地胡風 (沖縄県)
9:45 }	“帰る”という言葉の奥にあるもの ～世界観と人生を尊重したケアの実践～	フロイデグループホーム桂	黒澤 貴明 (茨城県)
10:00～ 休 憩			
10:30 }	展示会開催がもたらした趣味活動継続の効果 意欲を途切れさせない目標の力	多機能地域ケアホームありがとう グループホーム	平田 友莉 (広島県)
10:45 }	園芸活動がもたらす心身の状態	グループホームひまわり	矢嶋 良規 (群馬県)
11:00 }	いつまでも安全・安心な暮らしを目指して チームケアの重要性と転倒しない身体づくりを目指して	グループホームさんとも	青木 宏憲 (埼玉県)
11:15 }	ドッグセラピーが与える心理的効果 笑顔・安心・つながりが与える心の変化	グループホームアムリタ	山下万友美 (大阪府)
11:30 }	職員の想いを一つにする為の取り組み ～プリランテ明石の理念再構築への試み～	グループホームプリランテ明石	金澤 浩子 (兵庫県)
11:45～ 休 憩			
13:15 }	A様との最後の外出を迎えて A様にとって必要だったこと	多機能地域ケアホームありがとう グループホーム	三宅 杏梨 (広島県)
13:30 }	人材不足の中で取り組んできた業務改善について 収益と職員の処遇にも注目しながら	グループホームまほろば	山崎 康平 (長野県)
13:45 }	異文化にふれて 理想と現実	グループホーム北杜の郷	安里 詠美 (熊本県)
14:00 }	人材育成 未経験の新人職員の成長と教育係の教え方の難しさ	グループホーム希	立石 知巳 (徳島県)
14:15 }	夢に向かって一歩ずつ 技能実習生スさんの歩み	メイプルリーフ横島	小花真由美 (京都府)
総 評			

マニュアルではなく“その人”を見るケアへ

◆キーワード

- 1 本人の思い
- 2 PCC
- 3 気づき

～PCC が照らす“その人らしさ”の再発見～

茨城県・常陸大宮市

ふろいでぐるーぷほーむみわ
フロイデグループホーム美和発表者：管理者 笹さざき けいた
笹崎 圭太共同研究者： 高野 賢二 GH 職員
たかの けんじ グループホームしょくいん

施設名 フロイデグループホーム美和 併設 フロイデ デイサービスセンター美和 定員 40 名	社会福祉法人博友会 理念 私たちは、お客様が住み慣れた地域で、いつまでも安心して暮らしていただくために必要な保健・医療・福祉の総合的なサービスの提供に努めます。
--	---

(取り組んだ課題・はじめに)

グループホームにおける介護実践は、少人数で家庭的な環境を活かしながら、利用者一人ひとりに寄り添う支援が求められています。しかし現実では、職員は日々の業務に追われ、目の前の対応に精一杯になってしまうことも多く、「その人らしさ」や「個性」に十分に目を向ける余裕を持つことが難しい場面がしばしばありました。

その中で当事業所は、改めて利用者一人ひとりの“これまでの人生”や“価値観”“生活のこだわり”に着目し、「この人にとって何が大切か」「何を望んでいるか」といった視点で支援を見直す必要性を感じ、そこで導入したのがパーソンセンタードケア（PCC）の視点を基盤としたアプローチである。PCC の理念に基づき、職員一人ひとりの「気づき」や「感じた違和感」をチーム内で共有し、小さな変化に敏感になることを、日常の中で“違和感”を見逃さない姿勢を大切にする取り組みを始めました。

(倫理的配慮)

研究にあたり、関係者の同意を得ている。

(具体的な取り組み)

入居してから約 1 年が経過した認知症高齢者 A 様において、食事の場面での拒否的態度や反応の乏しさが増し、意欲の低下が見られた。身体的・認知的要因が疑われたが、明確な原因は特定されなかった。ある職員の観察によって、A 様の視線や表情の変化に注目が集まり、PCC の視点で再アセスメントを実施。生活歴やこれまでの習慣、性格の特性に着目した結果、A 様は几帳面で整理整頓を重んじる傾向があり、食事環境の乱れや視覚的な混乱に強い不快感を抱きやすいことがわかった。

そこで、食器の配置を見直し、配食やコントラストをつけるなど視認性を改善し、声掛けも本人のリズムに合わせて丁寧に行うようにした。その結果、A 様は徐々に食事への自発的関与を再開し、表情や会話の機会も明らかに増加した。

本事例は、表面的な行動の背後にある”意味”を掘り下げることが、PCC の実践においていかに重要で

あるかを示しており、職員の気づきを尊重し、支援に活かすチームアプローチの価値を再確認する契機となった。

(活動の成果と評価)

本事例における支援の再構築後、A 様は以下のような変化が見られた。まず、食事面での拒否的態度が減少し、自発的に箸を手に取る行動が再び見られるようになった。また、食事時の表情が柔らかくなり、職員との会話にも応じる機会が増加した。以前は 1 回の食事中に発する回数がほとんどなかったが、取り組み後は確認されるようになった。

さらに、生活全体への意欲にも変化が見られ、日中活動への参加率も向上した。本人の行動変容だけでなく、職員側にも変化が生じた。小さな変化への感受性が高まり「なぜこのような行動がみられるのか」といった PCC に基づく視点での対話が日常的に行われるようになった。

本取り組みは、PCC の原則である「その人の人生史・価値観を理解すること」「個別の意味に応じた支援を行うこと」の重要性を再確認させられるものであり、職員の気づきを尊重し、チームでの共有・対応できる体制がケアの質を高める鍵になることが示された。

(今後の課題・考察・まとめ)

本事例は、職員の「ささいな」気づき”が本人の生活歴や価値観に基づいた支援へとつながり、意欲や表情の変化を生んだ。PCC の実践においては、行動の背景にある”意欲”に注目し、チームで共有することが重要である。一方で、気づきを引き出し合うための対話の機会や情報共有の仕組みは十分とは言えず、組織的な支援体制の強化が今後の課題である。今後も「その人らしさ」を大切にしたいケアを継続するために、日常の小さな変化に丁寧に向き合う文化の醸成が求められる。

(参考・文献など)

トム・キットウッド著、小澤勲 監訳
「パーソンフードと認知症ケア」

入居者 QOL 向上に向けた家族との連携

◆キーワード

- 1 認知症ケア
- 2 家族
- 3 個別支援

個別イベント

広島県福山市

たきのうちいき けあほーむ

多機能地域ケアホーム ありがとうグループホーム

だいひょうしゃ まつばら ゆうじ

発表者：代表者 松原 夕爾

つばい みずき たまる じゅんこ

共同研究者：坪井 充希・田丸 順子

2004 年 1 月開設 木造 2 階建 18 名定員
平均介護度 3.8
ご家族のボランティア 6 組登録

共用デイ、短期入所実施 各種加算算定
2017 年リビングオブザイヤーで最優秀賞受賞

【はじめに】

利用者本人の QOL 向上にとって、家族との連携は必要不可欠なものと思われる。

GH と家族との交流・連携、利用者と家族との交流・連携等の知見の集積が必要である。各イベントを家族と連携で企画・準備・実行した事例を報告する

【倫理的配慮】

発表に際し入居者、ご家族、施設長に許可を得る

【個別イベント事例 1.2】

対象者：A 氏 女性 85 歳

病歴：アルツハイマー型認知症（H26）、正常圧水頭症（H26）、腰椎圧迫骨折（H27.30）

認知症自立度：Ⅲa 障害者自立度：Ⅱa

事例 1 (1) 経緯

令和 5 年 3 月まではサービス高齢者住宅に入居されていたが、失禁が多くあり短期記憶が難しいとのことで GH へ同年 4 月に移ってこられる。現在は 2 時間おきのトイレ誘導では時折失禁がある。膝の痛みから杖歩行にて独歩であるが、ふらつきがあり見守りが必要である。

令和 7 年 5 月に、A 氏の弟が入院しており A 氏の顔が分かるうちに会わせてあげたいが、失禁もあり、長時間の車での移動は難しいのではないかと認知症もあり記憶が三分しか持たないし本当に行く意味があるのか？と家族さんから相談がある。排泄に関しては定期的な声掛けでよいこと。車の昇降はできること。認知機能の低下に関しては、本人・家族が後悔しないようにしてほしい。と説明をする。

(2) 準備

入院先が山口県宇部往復 550 km のため、早朝出発夜帰宅から担当職員が介助方法の説明・指導を行う。A 氏が尿意の訴えがないため、1 時間ごとの排泄の声掛け・着替えの持参・車椅子の介助指導、万一の際に備えて車や車椅子にラバーシートを使用するよう助言した。また自立歩行は出来るが、膝の痛みもあり歩行不安定で転倒の危険もあり車椅子の使用を勧めた。食事は普通食で制限がないと伝えた。

(3) 結果

帰宅後、A 氏は「あれはまだまだ大丈夫じゃ」と言わ

れ、次の日も山口に行った事を職員に話される。印象深い事は記憶に残ることが分かった。この変化に「意味がない」と思っていた家族も面会時に山口に行った話を A 氏とすることで会話が広がり認知症の進行が進んでいないことに安心をされた。

事例 2 (1) 経緯

毎月家族と一緒に定期受診の帰りに回転寿司店に寄り食べて帰ってくる A 氏。叔母が寿司屋をしていたこともあり、帰宅後も「目の前で握った美味しい寿司を食べていた」と話され、自分で握って食べてみたいと口癖のように言われる。家族からは「GH では生ものは出ないですね？叔母の味を覚えているんだと思います」と話される。そこで GH で実際に握る機会を作った。

(2) 準備

自分で握れるように、シャリをうちわで冷ませるように手指訓練をする。元寿司職人の職員に経緯を説明し協力を得る。

(3) 結果

実際に教わりながら楽しく「ようやれんわ〜」「へたくそじゃ」と言われるが上手に握られた。家族からは、認知症だから全て忘れていたと思っていたが叔母のことを覚えていることが嬉しかった。A 氏からは今度は何を作ろうかなと活動意欲も出てきた。

【まとめ】

利用者と家族からの情報を計画に移す事ことは、以下の効果がある。

①認知症の方は短期記憶が難しいと言われるが、印象深く残る出来事は忘れない。

②利用者 QOL の向上につながる

③自分への自信となり意欲向上につながる

【考察】

家族との連携活動推進は、本人 QOL 向上に有益であり、さまざまな視点・視座をもって推進していくことが大切である。

ケアマッピングでひもとく認知症ケア

◆キーワード

- 1 認知症ケアマッピング
- 2 ひもときシート
- 3 PCC

DCM 法とひもときシートの活用

沖縄県・北中城村

とくていいりょうほうじん あがぺかい

特定医療法人

アガペ会

グループホーム

わかまつ

とぐち こふう
介護職・発表者：渡久地 胡風

いげい とよふみ
共同研究者：伊芸 豊史

沖縄県 北中城村内唯一のグループホームです。1 ユニット 9 名の 2 ユニットで運営しています。

共用型デイサービス定員 4 名・緊急ショートステイ定員 1 名で運営しています。

(取り組んだ課題・はじめに)

当法人では認知症ケアマッピング(以下 DCM と略)をとおしてパーソン・センタード・ケアの浸透を事業計画に掲げ運営している。新型コロナ感染の流行で活動ができない時期もあったが去年度より活動を再開した。グループホームの入居者 3 名を対象に DCM を行い、課題に対しひもときシートを活用し、「評価的理解」「分析的理解」「共感的理解」の考え方をチームで学び、介助者中心になりがちな思考を本人中心の思考に転換し、課題解決のためのアクションプランを作成した。今回は、1 名の対象者のアクションプラン作成までの取り組みと経過について報告する。

(倫理的配慮)

演題発表にあたり、取り組みの趣旨や成果を入居者様、ご家族および関係者に説明し、了承を得た。

(具体的な取り組み)

対象者：A 氏 女性 91 歳 要介護 4

認知症高齢者の日常生活自立度：Ⅲb

障害高齢者の日常生活自立度：A-2

現病歴：アルツハイマー型認知症、皮膚掻痒症、不眠症、精神運動発作

取り組みの流れは、①DCM の実施。②ひもときシートを活用したアクションプランの立案。③アクションプラン実施後に前後の変化を DCM で確認する。というものである。まず、DCM を行う 3 名を選定し、それぞれの課題をブリーフィングにて抽出した。A 氏の課題は「周囲に関心がなく、無為に過ごすことが多い」「食事に集中できず、食事に時間がかかる」の 2 点だった。6 時間の DCM を実施した結果をもとにサマリーを作成。ME 値はニュートラルの状態が 96%、ポジティブな状態が 2%、ネガティブな状態 2%だった。個人の価値を高める行為は 3 項目あり価値を低める行為はみられなかった。主要な行動カテゴリーと時間に対する割合では C (周囲に無関心) 21%、F (飲食) 32%、と食事に時間がかかっていることが明らかになった。職員へ結果をフィードバックし、今後の関わり方などディスカッションした。その後、法人内のひもときシート講師養成研修修了者の

協力を得て、ひもときシートを活用するための研修会を実施し、概要を学んだ。「評価的理解」では認知症の人を感情で判断してしまうことがあるため。介護者が自分の気持ちに向き合うところから始める。職員からは「食事に時間がかかり、業務に遅れがでる」「排泄や入浴時に介護拒否がある」との意見があった。次に分析的理解では、本人の言葉・行動を理解し本人の立場に立って意味づけすることが大切。介護者は「なぜ? どうして?」と問いながら、支援の視点を本人中心へと切り替える準備をする。課題に関連しそうな行動の書き出しでは、本人の言葉や行動をありのままに表現する。食事の促しや介助に「いいです」排泄や入浴介助時に強い介護抵抗で「今はいいよ」と手で払いのけるなどの意見があった。それに対し事実を確認する項目の 8 つの視点では、関連のありそうな情報を課題の背景にある事実や裏づけとして整理した。共感的理解では、本人の言葉・行動の意味を考え、「なるほど」「もっともだ」と共感することで本人の立場に立ち課題解決を探った。

(活動の成果と評価)

入居者様の情報をご家族へ聞き取り、インテークを読み返すことで、新たな情報が得られた。ひもときシートを実施することで、⑦本人にとってすぐに取り組めそうなこと、⑧試せそうなこと、④再度事実確認できそうなことを本人の立場になり話し合い、新たな課題の確認と、アクションプランを作成することができた。

(今後の課題・考察・まとめ)

DCM での客観的な評価に加え、ひもときシートによる課題の整理や事実の確認、入居者様に寄り添った思考の転換を行うことで、介護者の精神的な負担軽減につながると感じた。今後も継続してアクションプランを実施し、DCM での評価を行っていく。これからはホームの基本方針である、やさしさに包まれ笑顔で生き生きと安心できるグループホームを実践していく。

(参考・文献など)

ひもときねっと

認知症ケアマッピングマニュアル

“帰る”という言葉の奥にあるもの

◆キーワード

- 1 世界観
- 2 役割
- 3 自立支援

～世界観と人生を尊重したケアの実践～

かつら

茨城県・城里町

認知症対応型共同生活介護 フロイデグループホーム桂

くろさわ たかあき

発表者：介護福祉士・黒澤 貴明

平成15年度開設
1ユニット9名×2ユニット（18名）

【運営理念】

その人らしい穏やかな暮らしの為に

- ・自分でできる喜びと誇りを持てる居場所を提供
- ・ゆったりと自由に寛ぎ安らげる暮らしや環境を提供

（取り組んだ課題・はじめに）

当グループホームに2025年4月入居されたS様はグループホームを「会社」あるいは「集会所」と認識し、「もう帰らない」「配達的时间なの」といった言動が毎日のように見られました。また、男性職員を実の息子と誤認し、「一緒に帰ろう」と声をかけることもありました。

職員が現実を説明しても混乱や不安が深まるばかりで、「帰宅したい」という強い願望への対応に困難を感じていました。S様の言葉や行動の背景には、過去の生活歴や役割意識が反映されているのではないかと考え、本人の“世界観”を尊重したケアの必要性を感じ、支援方法の見直しを行いました。

（倫理的配慮）

今回の発表に際しましては、ご家族様の了承を得た上で、ケアの報告や写真の掲載をしております。

（具体的な取り組み）

S様の生活歴を改めて確認したところ、以下のよう背景が明らかになりました。

- 若い頃は百貨店でレジ業務に従事し、計算や接客を得意としていた
- 定年後は地域の配食ボランティアとして活動し、弁当配達などを行っていた
- 責任感が強く、人の役に立つことにやりがいを感じていた
- 現在も計算問題を得意としており、日中の活動として自発的に取り組んでいる

このような生活歴や価値観を踏まえ、以下のような具体的な取り組みを行いました。

- 得意な計算を活かした役割作り
- 日々、計算プリントを提供し、「記録係」や「集計係」といった形で活動に意味づけを行い、得意な作業に集中して取り組むことで安心と自信に繋がっていました。

- 会社という認識に沿った声掛け

「お疲れ様です」「今日も助かりました」と伝え、安心感と達成感を得られるようにしました。

○役割を持てる活動の工夫

洗濯たたみや食器拭きを「準備の手伝い」と位置づけ、自然な形で役割を担ってもらいました。

○誤認への対応

息子と誤認する職員との関りは否定せず、自然な会話を通じて安心感を得られるようにしました。

○自己決定の支援

衣類や飲み物を選んでもらうなど、小さな選択を重ねることで主体性を大切にしました。

（活動の成果と評価）

取り組みを始めてから、S様の「自宅へ帰りたい」という訴えは少しずつ減っており、「仕事は終わったからもう休もうかな」「ここも悪くないね」といった発言も見られるようになりました。日中の活動では計算問題への集中力が高まり、役割への意欲や達成感も明確に見られました。

職員との信頼関係も深まり、日々のやりとりが穏やかで安心感のあるものへと変化しています。S様の価値観や生活歴を理解し、それを支援に活かす重要性を実感する機会となりました。

（今後の課題・考察・まとめ）

今後の課題は、こうした個別性に応じたケアを継続的に行うためのチームの共有体制の強化です。また、本人の世界観に寄り添うことの意味や限界について、倫理的視点を持ちながら職員全体で継続的に振り返る機会も必要です。

S様の「帰ります」という言葉は、単なる症状の表れではなく、これまでの人生で培ってきた責任感や人のために動く力の表現であると感じました。その思いを否定するのではなく、日常の中で役割や得意分野を活かしながら支えることでS様は穏やかに日々を過ごせるようになっていっていると感じます。

認知症ケアにおいては「事実に合わせて」ではなく、「その人にとっての意味や価値を見つけること」が本当の意味での尊重であり、自立支援に繋がることを今回の取り組みから実感することが出来ました。

展示会開催がもたらした趣味活動継続の効果

◆キーワード

- 1 展示会
- 2 趣味活動
- 3 認知症の方への支援

意欲を途切れさせない目標の力

広島県 福山市

たきのうちいき

多機能地域ケアホーム ありがとう グループホーム

発表者：介護職

ひらた ゆうり

平田 友莉

2004年1月開設 木造2階建 18名定員
平均介護度3.8
家族ボランティア 6組登録

共用デイ、短期入所実施 各種加算算定
2017年リビングオブザイヤーで最優秀賞受賞

(取り組んだ課題・はじめに)

当グループホーム(以下GH)に入居されているご利用者A様。意欲的に取り組まれていた趣味活動だったが目標達成後に意欲低下がみられた。ちょっとした工夫ときっかけで意欲向上に繋がったケースを報告する。

(倫理的配慮)

発表に関して入居者、ご家族、施設長に許可を得ている

(活動概要)

【対象者】

A様 100代 女性

アルツハイマー型認知症

認知症高齢者日常生活自立度：Ⅲb

ADL自立度：A2

20××年12月に当GHに入居される。入居後は以前より趣味で取り組まれていた刺繍や編み物の趣味活動を継続しながら意欲的に過ごされていた。当法人が主催する展示会があり、A様と刺繍の壁掛けを作るという目標を立てた。同時に展示会に作品を展示するという目標と、A様の作品をたくさんの人が見てくれるという意欲向上に繋がるような声掛けを毎日行った。展示会まで意欲が落ちることなく作品を完成することが出来た。

実際に展示会に行き、達成感を感じることが出来、周りからの嬉しい言葉に大変喜ばれた。展示会では他の方の作品を見て「今度はあれを作りたい」とさらに意欲を示されていた。しかし、展示会での記憶は徐々に薄れていった。ある時から「たいがい」「めんどくさい」と趣味活動に興味を示さなくなり、机に伏せて何もしない日々が増えていった。目標達成後すぐに新たな目標を持って過ごしていただくことが出来なかったことで意欲低下に繋がったと考えた。意欲的に取り組まれていた時のことをA様が思い出し、また新たな目標を持てるように支援を行った。

・展示会で展示をした作品を居室のA様が見える位置へ配置して目に入るようにした。

・展示会での様子や喜ばれた時の写真をいつもA様が座る席に置いて思い出していただけるようにした。

・作品をまとめてファイリングして誰でも見ることが出来るようにした。

・意欲的に取り組まれていた時のことや展示会での出来事をA様に何度も話し伝えた。

・新たな目標を作るために今現在のA様に合った趣味活動を日々の生活の中のA様の声から探した。

・体調面、精神面に負担がかからないようにA様のペースで進めていけるように配慮した。

(結果)

・作品について職員や他ご利用者との会話が増えた。
・居室の目に見える位置に作品を置いたことや、当時の写真を見てその時のことを思い出せることで「今年もまたやってみようかな」という思いに持っていくことができ、新たな作品作りをスタートすることが出来た。

・評価されることで意欲向上に繋がった。

・「次はなにをしようかな」と楽しみをもつようになり、生活全般にわたって意欲向上がみられた。

最新の状況は、グループホーム大会で発表する。

(今後の課題・考察)

目標達成後には意欲低下がまた起こりうると考え、体調面や精神面に配慮しながら新たな目標設定が必要だと考える。年齢に関係なく目標を持つことで生活意欲が向上でき、認知機能が低下しても嬉しかったことや印象に残る出来事は少しの支援で思い出せることが出来る。

同一の活動でも内容の工夫や状況への柔軟な対応を行うことで能力や興味に応じた取り組みが出来る。また、目的や目標を持たせることで主体性が引き出され「自分らしさ」や達成感が生まれ、結果として活動へのやりがいや意欲の向上へ繋がった。

園芸活動がもたらす心身の状態

◆キーワード

- 1 庭園
- 2 園芸活動
- 3 バイオフィリア

群馬県・前橋市

公益財団法人 老年病研究所 グループホームひまわり

やじま よしのり

発表者：介護福祉士 矢嶋 良規

共同研究者：職員一同 高玉真光

理念 家庭的な雰囲気の中で自分の趣味や生活のリズムを生かし、その人らしく穏やかな生活を送れるよう支えます。「出来る力」を大切に支援します。

3ユニット 利用者 27名の事業所。設立：平成13年
平均年齢；女性 91.1歳 男性 90.0歳
平均介護度 女性；2.2 男性；1.7

（取り組んだ課題・はじめに）

人には自然との繋がりを通じて癒しや安心感を得る本能があり、視覚、聴覚、嗅覚、触覚を通して自然と繋がりストレス軽減や集中力向上など精神的安定やポジティブな感情をもたらすバイオフィリアという理論がある。

今回その効果を期待し、当施設にある屋上庭園を活用した入居者の園芸活動を計画した。

入居者に季節ごとの花や野菜の世話をする動作体験、成長変化の進行を観察してもらう感覚体験の相互作用による well being（心身の調和、社会的な繋がり、充実感を通じて持続的な幸せを感じる事が出来る状態）に繋げる事を目的に実践した事を報告する。

（倫理的配慮）

発表にあたり、個人が特定できないよう配慮し、ご家族に説明し同意を得た。

（具体的な取り組み）

①植物の成長観察

植物の成長を視る（視覚）収穫作業で土や野菜を手取る（触覚）。バジル、パクチー等香草の匂い（嗅覚）イチゴ、ミニトマトはその場で食べられ、ナスやジャガイモ等調理して日々のオヤツ、食事で提供する（味覚、嗅覚）風や水の音を聴き肌で感じる（聴覚、触覚）といった五感刺激を草花に囲まれたリラックスできる環境で行う。

②苗や種芋の植え付け、水やり

土を耕す、穴を掘るといった負担の大きい作業は職員が行い、参加者は苗の植え付けや水やり等出来る範囲で行う。

③グループ活動による他者との交流

ジャガイモ等の収穫を複数人グループで行う。かがむのが難しい方は椅子に座っていただく等工夫する。

④季節ごとの環境変化を感じる

車椅子等で作業に参加出来ない人にも植物や風景を観て季節の変化を感じてもらう。

（活動の成果と評価）

園芸活動を通じて生じた参加者の反応と効果
A様（90代女性、車椅子使用。）

咲いている花を見て「これはナスの花だよ」と他者に話しかける。

車椅子で自身は芋ほりに参加出来ないが、芋ほりしている人に「ほらあそこにも（芋が）あるよ」と声をかける。

A様は普段、物盗られ妄想や陰口等他者に対し攻撃的な言動がみられたが、普段交流の無い他フロアの方と同じ目的を持って作業する事で他者との交流、思いやりの表出といった社会的効果が見られた。

B様（90代男性、独歩要見守り。）

収穫したさつま芋を見て「まだ採るの早かった」と自身の感想を述べる。

プランターに植えた朝顔を見て自ら職員に「水をやらないきゃ」と訴える。

B様は以前園芸を趣味でされており、園芸の知識があった。

作物の収穫作業によって“手続き記憶”が、花を見る事で“エピソード記憶”が刺激され、自身の感想や作業意欲が自然に呼び起こされたと考えられる。

C様（80代男性、付き添い歩行。）

景色を観て「今日は山が良く見えるなあ」と話される。

C様は普段発語がほとんどなく椅子に座ったまま動かない事が多かったが、自然風景が感情や記憶を喚起し、リラックスや覚醒をもたらした結果言葉が自然に引き出されたと考えられる。

（今後の課題・考察・まとめ）

園芸活動は参加者の身体機能を考慮する必要があるため、かがんだりしゃがむといった動作が難しい人の為に通路を広く確保し、補助具を使いやすい環境を整え参加できる人を増やしたい。

一方昨今の気温上昇で植物の育成が難しくなっている。又、熱中症の危険性もあるので、屋上での作業は出来る期間に限られる。

そこでプランター栽培等、ベランダや屋内で出来る事を併用するプランも検討していきたい。

（参考・文献など）日本における園芸療法の現状と今後の可能性 小浦誠吾

認知症の人の well-being をもたらす園芸活動の実践 増谷順子 日本認知症ケア学会誌 2019. vol118-2

いつまでも安全・安心な暮らしを目指して

◆キーワード

- 1 チームケア
- 2 ADL維持
- 3 自立支援

チームケアの重要性と転倒しない身体づくりを目指して

埼玉県・所沢市

グループホーム グループホームさんとも

発表者：実務者研修 青木宏憲

共同研究者： グループホームさんとも職員

2017年5月竣工、所沢市に開設したグループホーム
2ユニット並列型 定員18名 平均介護度2.7

利用者が、今までの在宅生活をグループホームの中で継続できるよう、大切にしてきた事や新たにしてみたい事を聴取し、自立支援の実践を職場全体で支援しています。

(取り組んだ課題・はじめに)

当施設は、竣工から8年目に入った施設です。平均介護は2.72(2025年8月現在)と全国平均とほぼ同等の利用者が入居されている。この事から認知症だけでなく日常生活上の介護支援が必要な利用者が増えていると考えられる。

健康とは何かと考えた時に、在宅生活と同様の生活・ADL・IADL動作ができる事が本人のQOLの維持に繋がると考えますが、当施設では運動のケアが不十分だと感じていた。

当施設では、3か月に1度の生活機能向上連携を図り、リハビリ職員に評価、運動の提案をしてもらっているが、3か月に1度では日常生活の変化を追う事が不十分であると感じていた。

今回、多職種間情報共有をより細かく提示し、適宜運動提案、動作評価を行うとともに、転倒しない安全・安心な生活を継続する為のケアの方法を実践する機会を得たため、報告する。

(倫理的配慮)

今回発表にあたり、入居者・家族へ説明し、承諾を得た。

(具体的な取り組み)

- ① 定期評価、運動提案
- ② 移動方法、シーティング指導(適宜)
- ③ フロア内歩け歩け(週2回)
- ① 定期評価で介入している訪問リハビリ職員と、現場介護職員等が共同して1人の利用者について評価する際、「～が出来るようになってほしい」などの提供にとどまっていた情報を、利用者の性格や1日の動き、今本人が困っている事、運動負荷制限、本人・家族の思いなども提供内容に盛り込み、評価・運動提案を実施した。
- ② 今まで3か月に1度の定期評価を実施し、多職種共同で個別機能訓練計画を見直していたが、3か月に1度では、必要な移動手段の検討が不十分な現状があった。隣接している同法人老人保

健施設の訪問リハビリ職員に3か月に1度なく必要時の訪問を依頼する対応に変更した。

- ③ 個別対応が多く、運動が出来ない事もあったため、リハビリ評価で自立度の高い人を中心にフロア内を歩く時間を設け、運動機会を提案した。

(活動の成果と評価)

- ① 漠然とした目標を立てるのではなく、日常動作や性格、運動意欲などを評価する事で、その時に必要な介助量や運動量の提案をもらい、利用者に目標を持った運動を提案出来るようになった。
- ② 入居(6月)から間もない利用者の変化に対し、随時相談、評価を共同で実施した事で、車椅子移動だった利用者が、7月には日中T字杖使用介助歩行・夕方車椅子介助、現在昼夜T字杖使用介助歩行(8月)に変更となった。
- ③ リハビリ評価の下、周回数を決めて開始した。意欲的な利用者がもっと歩きたい希望あり、リハビリ職員に相談し回数調整を実施した。その際、身体機能面や疾患に伴う運動制限をリハビリ職員からエビデンスのある指示をもらった事で、安全な運動提案の実施が出来るようになった。

(今後の課題・考察・まとめ)

当施設では、医師や看護師、リハビリ職員は外部からの支援で、日常的に利用者を支援出来るのは介護職が中心となっている。チームケアとして利用者の希望や思いを引き出し、自立支援を進めていくにあたり、多職種で情報共有をする事の重要性を改めて知る機会となった。利用者個人の情報共有が深くなされた事により、現場では以前より「認知症だから」という言葉は減っている印象がある。今後も利用者の個別性を尊重したケアを実践していきたい。

(参考・文献など)

厚生労働省 資料 認知症対応型共同生活介護(認知症グループホーム)

ドッグセラピーが与える心理的効果

◆キーワード

- 1 介助犬
- 2 癒し
- 3 意欲向上

笑顔・安心・つながりが与える心の変化

大阪府・泉佐野市

しゃかいふくしほうじんあむりた

社会福祉法人アムリタ グループホーム アムリタ

あむりた

やました まゆみ

発表者：管理者・山下 万友美

かち ゆみこ

共同研究者： 加知 由美子

2003年10月1日開設 1ユニット9名
 2023年4月1日高齢者複合施設ジリタス3階に移転
 サービス内容：入居・共用型デイ・緊急ショート

【理念】家庭的な環境のもと、生活の継続性と個別性を
 尊重し楽しみにある生活を支援します。

(取り組んだ課題・はじめに)

当法人関係者のもてに迎えられた介助犬のラブラドル・レトリバー、ジュリエット。ある日、散歩の途中でグループホームを訪れた。その瞬間、ご利用者の皆さんの瞳は一斉に輝き、満面の笑みが広がる。「かわいい！」と声があがり、場の空気は温かな一体感に包まれていく。この感動をきっかけに、私たちは“笑顔を支援へとつなげる”新たな取り組みをスタートさせた。

(倫理的配慮)

ご利用者及びご家族に対し、目的・方法・発表内容について事前に説明を行い、写真掲載に関しても同意を得た上で実施した。

(具体的な取り組み)

定期的な訪問を依頼し週に1度、ジュリエットがグループホームを訪れることが決まる。ここでの活動は介助犬としての仕事ではなくあくまでご利用者の皆さんの癒しと楽しみの時間。その場では誰一人傾眠することなく、皆が犬に心を向けている。更に「リードを持って散歩したい」という希望から室内や廊下での散歩を開始。訓練を受けているジュリエットは、指示に従い、ご利用者の歩調に合わせて優しく歩く。犬との触れ合いが、癒しを超えて「支援」へと発展していく。その一歩が、確かにここから始まった。

Aさん(女性) 「スーパーに行きたい」そんな希望を持ちながらも長距離を歩く機会がなくなっていた。フロア内の歩行から始め、やがて建物周辺へと距離を広げる計画を立てた。更に「ジュリエットの為におもちゃを作りたい」という新たな意欲が芽生え、布や毛糸を使いおもちゃを作り始めた。“誰かの為にできる事”を見つけたその笑顔は何よりも力強いものであった。

Bさん(男性) 笑顔が少なく、感情表現が強い。しかしジュリエットに会った瞬間、その手は自然と犬の頭を撫で、初めて柔らかな笑顔を見せてくれた。もともと気乗りしていなかった歩行訓練や階段昇降をジュリエットと共に歩むことで意欲的に取り組む計画を立てた。また、熱を出した際には、ジュリエ

ットがそっと添い寝をしその温もりに包まれて安心感のもと療養する事ができた。犬との触れ合いが、人に希望と変化をもたらす。ジュリエットは、誰かの人生を明るく照らす存在になっている。

(活動の成果と評価)

Aさん(女性) ジュリエットのリードを握り歩くうちに、自然と歩行距離が伸びる。ご家族と共にスーパーに出かけ、しっかりと歩みを進める事ができた。裁縫や編み物が得意だったAさんは、心を込めて作ったおもちゃを嬉しそうに手渡し、ジュリエットが夢中に遊ぶ姿を見つめながら、満面の笑みを浮かべた。その瞬間、Aさんは確かな“達成感”を感じ、とても意欲的に歩行練習や手作業に取り組むようになる。活力を取り戻した姿は、周囲の人々にも大きな希望を与えた。

Bさん(男性) 笑顔がなく、険しい表情で過ごす事が多かったが、ジュリエットと出会ってからはその表情が少しずつ和らぎ、優しい眼差しと笑顔を見せるようになる。歩行練習でも、リードを握ると自ら一歩を踏み出し、確かな筋力を養っている。犬との信頼関係が、Bさんの心と身体に新しい力をもたらしている。ジュリエットは、癒しを超えて“生きる意欲”を呼び起こす存在。その一歩一歩が、人生に新しい光を灯している。

(今後の課題・考察・まとめ)

ジュリエットの存在は全てのご利用者の日常生活において大きな意味を持っている。訪問そのものや訪問時間をしっかりと記憶できることは、認知機能への良い刺激となり、確かな効果を生み出している。ジュリエットは、癒しや笑顔、そして記憶を無理なく引き出し、ご利用者の生活に活力をもたらしてくれる存在。「私たちがどれだけ頑張っても、ジュリエットにはかなわない事がたくさんある」そう実感させられる程の力がある。これからもジュリエットの力を借りながら、認知症ケアへと繋げていきたい。彼女は、まさに希望と癒しを届けるパートナーである。

職員の想いを一つにする為の取り組み

◆キーワード

- 1 想い
- 2 意思疎通
- 3 コミュニケーション

～ブリランテ明石の理念再構築への試み～

兵庫県・明石市

しゃかいふくしほうじんさんきかい

あかし

社会福祉法人 山輝会 グループホーム ブリランテ明石

かなざわひろこ

発表者：計画作成担当 金澤浩子

たけうちきょうこ・きたむらまい・つちやまりこ

共同研究者：竹内恭子・北村真惟・土谷まり子

平成 24 年 3 月 1 日に開設。定員 18 名 2 ユニット。
できないことより「今できること」に着目し、役割を
持った生活を送って頂けるよう支援しています。

ブリランテ明石は、認知症という個性を活かし、大切な
一日一日を自分らしく輝いてもらえることを大切にしてい
ます。

(取り組んだ課題・はじめに)

仕事を行う中で「入居者に対しての想い、仕事に
対する姿勢、ケアの仕方」がばらばらだった事で、
入居者が困っているのではないかと感じた。そんな
時、今のブリランテ明石の理念（以下「理念」と称
する）を見返してみた。自分は何に沿って頑張るの
だったか、自分がしたい事も違っていたとも感じた。
皆も理念に沿って働いているのか、違っているの
ではないかと。

だったら自分達の言葉で、想いの入った理念を
表現してみたらどうかと思った。

今回、入居者、家族はもちろん、職員がいきいき
した人生を送る為に、何を目指して、何を大切に
していくかを、理念として改めて見直す事とした。

(倫理的配慮)

関係者、職員に口頭にて了承を得た。

(具体的な取り組み)

① アンケートを活用し職員の素直な気持ちを聞き
出した

(方法) どんな想いで働いているか、仕事をするう
えで目指している事や大切にしている事、不満に思
っている事を書面で提出してもらい、見返す事がで
きるよう冊子にした。

(気づき) 一人ひとり想いを持って働いている事に
気付いた。意思疎通できていない事が不満に繋が
っており、コミュニケーション不足・互いの理解不足
がある。職員同士でお互いを知り、相手を想う事が
重要だと感じた。

② お互いを理解する為の取り組み

(方法) 「良いところ、好きなところ、尊敬するこ
ろ 5 つメッセージ」(以下「メッセージ」と称する)
を全職員に書き出してもらい、一人ひとりに配布。
(気づき) 「メッセージ」を受け取った事で、自分
では気付いていなかった一面に気付く事ができた。
人は自分が思っているより、私の事を見てくれて
いたのかという事に気づき、他者からの承認で、自
分の価値にも気付く事ができた。

③ 取り組みの検証

字体で書き手がわかってしまう事で、本当の想
いを伝えるに難しい。Google フォームを活用し、「メ
ッセージ」を受け取った事で、お互いの理解、意
思疎通、コミュニケーションについて変化はあ
ったのか意見を募った。

④ 職員のことを知ってもらう為の取り組み

「メッセージ」を参考に、職員一人ひとりに
キャッチフレーズを付け、職員紹介するボード
を作成した。私のキャッチフレーズ

【目力強め、キラキラ輝くお姉さま的存在

入居者様への愛が止まらない】

(活動の成果と評価)

職員全員の想いを聞き、アンケートを実施する
事で、私達自身も本当にそれでいいのか、間違
っていないかと日々不安を感じている。お互
いの想いを知りたいと感じている事を知る良
い機会になった。

お互いの想いを理解しやすくする為「メ
ッセージ」を書き出した結果、会話しやすくな
ったという意見と共に「気持ちが楽になっ
た」「やる気が出た」等、前向きな意見は多
かった。職員自身も自分の価値に気づく事
ができ、職場の空気感には影響すると思
えられる為、今回の取り組みに意味は十分得
られたと考えられる。

認知症基本法を基に、共同研究者の想
いを伝え、職員が大切だと感じた考えを
聞いた結果「一人ひとりと向き合う」「
一人の人間として尊重する」を大切に
にしたいという意見が多く、ばらばらだ
と思っていたケアに対する想いが、同
じだった事に気付いた。

(今後の課題・考察・まとめ)

職員間で、同じ想いを抱き仕事をして
いる事を共有しようとしていなかった。
今回の取り組みは定期的に職員間
でお互いの想いを理解する場を設ける
べきだと考えるきっかけとなった。
理念を再構築するところまで至って
いないが、入居者や家族の想いも
引き出せるよう、取り組んでいき
たい。自分達が不安で迷った時、
理念に立ち返ると自信になるもの。
そんな理念を作っていく。

A様との最後の外出を迎えて

◆キーワード

- 1 グループホームケア
- 2 個別ケア
- 3 外出

A様にとって必要だったこと

広島県福山市

たきのうちいきけあほむ

多機能地域ケアホーム ありがとうグループホーム

かいごしょく みやけ あんり

発表者：介護職 三宅 杏梨

共同研究者：職員一同

2004年1月開設 木造2階建 18人定員
平均介護度3.8
家族・ボランティア6組登録

共用デイ、短期入居実地、各種加算算定
2017年にリビングオブザイヤーで最優秀賞

(はじめに)

当認知症グループホーム（以下GH）では、終末期に入るとご利用者のニーズやご家族がご利用者に行ってほしいケアを出来るかぎり行うようにしている。

今回は、20××年9月に意識消失・徐脈により救急搬送となりそのまま入院。腎機能低下にて治療法は透析しかないとの診断を受ける。ご家族が最期は住み慣れた顔なじみの職員がいるGHで透析をせず服薬治療のみを希望された。退院となったA様がよく口にしていた思い出の場所への最後のお出かけについて報告をする。

(倫理的配慮)

発表に関して入居者、ご家族、施設長に許可を得ている

(具体的な取り組み)

20××年10月の退院に際し、かかりつけ医(往診)の先生からは、いつ病状が急変、悪化して終末期に入ってもおかしくないとご家族には説明される。退院して戻られてからは、食事が摂れない時は点滴をし、回復を繰り返していたが、徐々に病状は悪くなっていった。かかりつけ医から20××1年6月下旬「終末期である」と話がでた。

病状が悪化し始めたA様を思い出の喫茶店で大好きなコーヒーを飲んでもらいたいと思い連れていく事にした。

(活動の成果と評価)

体調が悪くなり、外出もあまり出来なくなってきたA様。徐々に食事もとれなくなり、水分摂取のみで毎日朝から夕方まで一か月以上点滴が続き、ベッド上だけの生活となっていた。終末期と判断される前に水分がいつもより多く摂れ、点滴が午前中で終わり、顔色もバイタルも良く車椅子でフロアに出てくる日が何日か連続してあったため喫茶店への外出を決行した。

GHから一番近い喫茶店に行くことも検討したが、GH入居前に住まれていた施設の中にあるカフェなら看護師がおり急変にも対応でき、A様に喜んでいた

だけののではないかと考えた。

外出当日の朝A様のバイタル・体調確認をし、主治医に相談をして外出許可がでた。同行スタッフを厳選した。

大好きだったコーヒーは味覚が変わっていたのか飲むことはできなかったが炭酸もお好きだったのでジンジャエールと、アイスクリームをよく召し上がられていたのでソフトクリームを食べられた。併設する以前入居されていた施設にも訪問し、懐かしい顔ぶれと交流し笑顔が見られた。この後、血圧低下・発熱が続き外出できるような状態にはならず、これが最後の外出となる。

(今後の課題・考察・まとめ)

終末期の外出を行うにあたり、次のことが今回必要だった。

1. 本人が望む出かける場所の選定
2. 外出に同行したスタッフと外出後にケアに当たるスタッフとの情報共有を行う
3. 訪問看護、主治医との連携を密にすること。

利用者にとって日常的にしてきたことは大切だと考える。状態が落ちてきている利用者にとっても、そう考えるため、このことを共有し、最後まで自分らしく過ごせる場所でありたいと思う。

人材不足の中で取り組んできた業務改善について

◆キーワード

- 1 人材不足
- 2 業務改善
- 3 人材定着

収益と職員の処遇にも注目しながら

長野県 塩尻市

認知症対応型共同生活介護・グループホームまほろば

やまざき こうへい

発表者：介護福祉士・山崎 康平

ふじさわ しんや

共同研究者：藤澤 伸也

グループホーム。ベッド数9床。1ユニット。職員数8名(管理者1名、介護支援専門員1名、介護福祉士6名、常勤換算:6.66(R7.7月現在))。介護度区分における要支援、短期入所の受け入れ登録なし。

お花見ツアー、夏祭り、文化祭などの行事を毎月実施。主な取得加算:認知症チームケア推進加算(Ⅱ)、生活機能向上連携加算(Ⅱ)、医療連携体制加算(Ⅰ)ハ、栄養管理体制加算、口腔衛生管理体制加算、口腔・栄養スクリーニング加算、科学的介護推進体制加算など。

(取り組んだ課題・はじめに)

介護業界の人材不足に悩む今日において、自施設でも職員不足を経験している最中である。そのような中で、職員の新規獲得を望んでもただでさえ不足しているという状況では簡単な話しではない。

そこで、いかに既存の職員に対して業務がしやすい環境とは何かを考え、取り組んでいった結果、職員の処遇だけでなく事業所の収益にも効果を認めたため、ここに報告する。

(倫理的配慮)

調査協力、研究発表に際し、関係者各位へ説明し、承諾を得ている。

(具体的な取り組み)

人材不足の中で、新規の職員を獲得するのは時間や労力を要す昨今である。そのため、既存の職員が少しでも長く勤めていける環境作りを優先し、業務改善に取り組んできた。

ここで気を付けたこととして「スタッフがいないので、代わりに別のスタッフがその分を補填する」と言う足し算(プラス)の考えではなく、「削れる業務はないか?と見直す引き算(マイナス)の考えが重要」と捉えた点である。

具体的には、①夜勤者から日勤者への申し送りを朝食の準備をする時間に口頭にて簡単に伝えるようにした。②3食の食事を併設の同法人医療機関の厨房で作ってもらい配食してもらうようにした。③屋外で育てていた観賞用の花を撤去して世話の時間を短縮した。④レクリエーション活動の内容は可能な限りセルフでできるものへ切り替えた。⑤3箇所あるトイレの掃除を簡易化した。

また、特に効果を認めたものとして、⑥介護ソフト(タブレット)の導入、⑦ポリファーマシーへの対応があげられる。

これにより、従来の業務から1日当たり約123分の業務の削減につながった。

(活動の成果と評価)

業務改善で削減された時間は、新しい認知症ケアに対する取り組み(認知症チームケア推進加算など)や、職員の処遇のために、事業所内研修会の頻度を増やす、新しい資格取得のための研修(認知症介護実践者研修、認知症介護実践リーダー研修、介護支援専門員取得など)に参加する、有給休暇を今まで以上に取得することへ費やすことが可能となった。

加えて、以前は職員が足りないことを理由に新規入居者の獲得に消極的になってしまう一面もあったが、職員全体のモチベーションも一変し、入居者満床率も向上したため、収益の増加を認めることができた。

(今後の課題)

しかしながら、職員の数が不足しているという弊害は残されており、入居者に対する個別的な関りは少ないままである。また、パンデミックや災害時の対応、入居者の緊急病変や職員の急な休みなどへの対応は未だ難渋している状態である。

(まとめ)

業務改善への取り組みには、足し算でなく引き算を徹底的に行うことが重要であり、その結果得られた時間を、より専門的な認知症ケアや職員のための処遇改善へとつなぐことが可能となった。

また、新規の利用者獲得へ消極的になる時期もあったが、業務改善後からは入居者満床率も向上し、収益の増加も認めることができた。

今後も、職員数と業務内容のバランスに注視しながら業務改善に取り組んでいきたい。

(参考文献)

1) 谷野浩太郎(発行)「介護報酬の解釈①単位数表編第12版」社会保険研究所、2025年

異文化にふれて

◆キーワード

- 1 言葉の壁
- 2 文化の違い
- 3 目標

理想と現実

熊本県・熊本市

かぶしきがいしゃ ぼうせい ぐるーぷほーむ ほくとのかと

株式会社 望星 グループホーム 北杜の郷

発表者：介護福祉士 あさと えみ 安里 詠美

共同研究者： とみえ ふさえ 富江 房枝

グループホーム北杜の郷 2ユニット（計18名）
 平均年齢：88歳 介護度平均：3.1 認知度平均：2.8
 施設は平屋1階建て

法人理念：で愛・ふれ愛・たすけ愛
 施設理念：・科学的根拠に基づく介護
 ・リスクマネジメントの周知徹底
 ・地域の一員としての地域貢献

（取り組んだ課題・はじめに）

介護職員の人材不足により、ケアが行き届かない。
 今回初の試みで特定技能外国人スタッフを迎えることにした。

（特定技能とは、母国で「技能検定試験3級」や「特定技能1号評価試験」+日本語試験（N4）を受験し来日する。（期間は5年）今回採用した外国人は母国で介護実習も終了し来日してきた。）

私たちも外国人スタッフを受け入れるのは初めてのことであったが、説明時に聞いていたこととは全く違う文化の違いにも戸惑う、という所からのスタートだった。現在インドネシア、スリランカ各4名が頑張っている。明るく、楽しく働けるようになるまでの約6ヶ月間の変化や経緯を報告する。

※各国平屋の社宅を準備し4名で暮らしている。

（倫理的配慮）

国の文化や、宗教の違いをお互い理解し合う為、インドネシア、スリランカのエージェントの同意を得る。

（具体的な取り組み）

1. 外国人スタッフ用に当施設が作成している「マニュアル」を英語・インドネシア語に変換し一人一冊渡し説明する。
2. 入居者の顔と名前が一致するよう、各フロアテーブルに漢字、ふりがなを提示。
3. 分かりにくい、伝わらない時に翻訳機を使用。

エージェントから聞いていたより全く日本語が理解できず、ほぼ決まった単語しか言えなかった為、勤務外でもなるべく日本語で会話するように指導した。

4. こちらの指導が伝わっているか、通訳に来てもらい丸1日日勤帯で同行しその都度通訳してもらう。
5. 私生活でのサポート。

6. 母国のおやつ作りを通しての交流。（活動の成果と評価）

1. インドネシアは英語が読めないとの事で、その都度分からないところはゆっくり、かみ砕いて説明する。一日の流れを一緒に仕事をしながら覚えてもらおうと2週間程で覚え、1ヶ月後には業務のほとんどを一人で出来るようになった。
2. ふりがなを付けていた事が良かったのか、2～3日ですぐに覚え入居者との交流、関わりもスムーズにできるようになり、すぐに笑顔で会話できるようになった。
3. スリランカは自宅でも日本語で会話をし、テレビも設置しNHKを見て、日本語の勉強をしている分理解力は早かったが、一方でインドネシアは勤務以外で日本語を使用することが少なく、テレビを見て勉強という考えもなかったせいか、理解力に差がでる子もいた。

4. 通訳を入れたことで今まで自分で理解していた事の間違いが分かり、ケアの見直しをすることでより一層業務がスムーズになった。
5. 私生活のサポートをすることで、お互いが異国の文化に関わりコミュニケーションが図れた。

6. 入居者も食べたことのないお菓子里に興味をもつことで、コミュニケーションが図れた
 （今後の課題・考察・まとめ）

・みんな目標をもって来日していると思うが、家族を日本に呼び一緒に暮らしたいと願っている子の方が成長が早いと感じた。

・外国人スタッフが入った事で入居者も異文化に触れる事ができ、日本人スタッフでは普段話さない会話などが聞かれていた。

（参考・文献など）

- ・朝日新聞
- ・出入国在留管理庁 育成就労制度の概要

◆キーワード

- 1 人材確保
- 2 新人教育
- 3 離職防止

未経験の新人職員の成長と教育係の教え方の難しさ

徳島県 石井町

のぞみ
グループホーム 希発表者： 管理者 たていし ともみ
立石 知巳共同研究者： 介護主任 いしだ ちえ
石田 千恵

運営主体：社会福祉法人 有誠福祉会
施設名称：グループホーム希
提供サービス：認知症対応型共同生活介護

開設：平成 19 年 5 月 職員 16 名（常勤 12 非常勤 4 名）
2 ユニット 18 名（男性 2 名 女性 16 名）
平均年齢 90 歳 平均介護度 3.44

（取り組んだ課題・はじめに）

当事業は、今年で 19 年目になり、私が管理者をさせて頂いて約 3 年になります。この約 3 年間の間に様々な職員の退職、入職、異動がありました。また、職員の高齢化も進んでおり、世代交代が急務となっています。

この度令和 7 年 7 月 1 日より介護職員が入職することとなる。

新人職員 N 職員は女性 32 歳で介護未経験。祖母の介護をしてそれから介護する楽しさを知り入職に至る。

（倫理的配慮）

発表にあたり、スタッフに説明を行い、了承得る。

（具体的な取り組み）

新人職員に業務について 1 週間ごとの出来たこと、出来なかったこと、どうして出来たのか、どうして出来なかったのかを記載してもらった。

（新人職員の視点）

1、入職時の不安

利用者様の年齢、性別、介護度、性格等がそれぞれ違い、適したケアを提供する難しさを感じる。書類上や先輩上司から直接聞くことより、自分自身が直接関わることで少しずつ知っていく。

2、入職 1 週間

全介助者の移乗介助、オムツ交換に苦戦している。先輩職員から教わり、又、自宅で携帯の You Tube で勉強したりしているが、まだ一人でできる自信がなく戸惑っている。

また、様々な認知症の方との接し方の難しさを感じ

じる。

3、入職 2 週間

全介助者のオムツ交換や移乗介助がスムーズに出来なかった。マンツーマンで説明し、実践回数を重ねながら経験を積んでいく。

入浴介助や臥床介助が徐々に出来ていることに自信を持っている。

4、教育担当者の悩み

トイレ介助、食事介助は回数をする事により出来るようになり本人も自信を持ち積極的に介助にあたっているが全介助の方のオムツ交換、移乗介助が不安との事だが先輩職員が介助するのを見学に来たり実践したりしてほしいが積極的に介助にあたらないので回数を重ね経験してほしい。

ゆっくり指導していきたい気持ちと、早く覚えてもらい一人前になってほしい気持ちがあり、どのように指導したらいいのか日々悩んでいる。

（活動の成果と評価）

1 週間ごとの出来たこと、出来なかったこと、どうして出来たのか、どうして出来なかったのかを記載してもらうことにより、なかなか口に出して言えないことでも上司と情報共有でき、また、自分自身でも再認識できることにより、次へのステップアップへ繋がりがやすかったのではないだろうか。

入職して 1 か月程経過したが今後も個人面談や何気ない会話の中から本人の不安に思っていることを取り除き、いかに介護を好きになってもらえるか、モチベーションを下げないようにするかを考え、新人職員のタイプに合わせて教育することが重要だと感じたので今後につなげたいと思います。

夢に向かって一歩ずつ

◆キーワード

- 1 笑顔
- 2 寄り添い
- 3 やりがい

技能実習生スさんの歩み

京都府・宇治市

デイサービスメイプルリーフ檜島

発表者名：管理者 小花真由美

共同研究者 奥田久美子 久保田素加
ス・レイ・ヌエ

地域密着認知症対応型デイサービス

「自立」「開放」「支え合い」「前向き」の理念の下、利用者が安心し、ご本人らしく生活が送れることを目指している。

(取り組んだ課題・はじめに)

当法人では令和2年1月より外国人技能実習生の受け入れをしています。初めは人手不足で受け入れていましたが、とても素直で仕事熱心なこともあり、今ではベトナム2名 ミャンマー10名 フィリピン1名の方が働いています。ス・レイ・ヌエさんがメイプルリーフ檜島に令和5年2月に入社したとき、疑問になった事や認知症の関わり方などをポスターセッションの題材として会社内で発表しました。今回はその2年間の成長と心境の変化について報告を行います。

(倫理的配慮)

発表にすることによって各関係者に了承を得ている。

(具体的な取り組み)

- ・アンケート実施
- ・質問しやすい環境づくり
- ・言葉遣い
- ・人材育成
- ・スキルアップ

(活動の成果と評価)

日本人の労働文化を理解、尊重し適切な言語とコミュニケーションを使用することで上司や同僚、利用者様とうまく交流することができます。当初、日本語が早く聞き取れない、方言がわかりにくい、利用者様の難しい名前やケース記録の難しい漢字が読めないなどの課題がありました。ゆっくり分かりやすく話す、漢字は職員がフリガナを打ち、スさん自身も積極的に使用することで早く覚えることができています。利用者様の対応や介助方法に悩んだ時は、職員全員で話し合い、私たちからコミュニケーションに務め、不安や悩みを一人で抱え込まない、話しやすく質問しやすい環境を作っています。

声かけや、声の大きさや話すスピードを合わせる、言葉に耳を傾けゆっくり話を聞くなど、一人一人に寄り添い、丁寧な言葉を使い認知症の方に対して思いやりのある関わりをしています。行事レクの担当を初めは職員の補助として行っていましたが、今では一人で担当、企画してやり遂げる事で達成感を得ています。どのような内容が利用者様に喜んでもらえるのか、認知度が一人ひとり違う利用者様に参加してもらう為にはどのような工夫が必要なのか考え実施しています。雰囲気明るくする力を持っていて、元氣なかけ声や笑顔で利用者様の笑顔を引き出しています。利用者様に安全に安心して、心地よく過ごして頂く為に整理整頓する事の大切さや、日本の習慣やおもてなしの心を伝えています。お茶を出すタイミングや、おしぼりを言葉かけしながら手渡しするなど、細やかな心配りを行えるようになっています。

(今後の課題・考察・まとめ)

現状に満足せず、当施設のグループホームに手伝いに行き、今の現場では習得できない車椅子などへの移乗やベッド上での身体介護など、介護技術の習得に意欲的です。介護技術の向上、新しい技術の向上、資格取得、これらは自身のスキルアップとなります。仕事で利用する日本語、情報伝達だけの日本語ではなく意思疎通、感情表現できる日本語が利用者の心に届き、信頼関係が生まれます。今後も継続的なレベルアップが必要になります。この2年間、認知症の方と関わりを深めていく中で楽しさや、やりがいを感じるようになり、いつか母国で介護を学びたいと思う人達に、技術やスキルを教える仕事をしたいという思いが芽生えています。現在、N2(日本語能力試験)を取得し、今後N1に挑戦、来年の介護福祉士試験に向けて実務者研修を受けるなどこれからの活躍を期待したいです。

明るく笑顔で話しかけ、利用者様の意思を尊重した